

【高等学校部門 最優秀賞】

## 山椒の木

奈良学園高等学校 1年 北川 慶典

僕の家裏庭には、山椒の木がある。ハナミズキやツツジ、アヤメなど、様々な花が咲く中にポツンと一本だけ、小ぶりな木が立っている。庭の様子とそぐわない感じを受けるため、どうしてそこに山椒の木があるのかずっと不思議だった。

そこで、その木の事について祖母にきいてみた。祖母の話では、曾祖母が生きていた頃には、裏庭には花など植えておらず、山椒の木が二本あっただけだったそうだ。木は今よりずっと大きく、先端には手が届かないくらいだった。そしてその木は、観賞用ではなく、食べるための木だった。曾祖母は、山椒の葉を摘み、軸を取り除き、大きなすり鉢にそれを入れ、葉の形がなくなるくらいすりつぶして、山椒味噌を作っていたらしい。筍の時期には木の芽和えにしたり、豆腐にぬって田楽のようにしたり、ご飯にのせたり、様々な食べ方をしていたそうだ。「おかあさんの山椒味噌は本当においしかったのよ」と祖母がなつかしそうに言った。曾祖母が亡くなってからは、手間がかかるうえに同じくらいおいしく作れない、という理由から全く作らなくなったそうだ。年老いた方の木は枯れてしまい、残った一本を曾祖母の思い出として、祖父が手入れをしている。

僕は、曾祖母の事は覚えていないが、細やかな暮らしを送りつつ、季節を楽しむ人だったのではないかと思った。

裏庭に一本残った木では、今年も山椒の葉が青々としている。曾祖母はどんな山椒味噌を作っていたのか、どれくらいおいしかったのか、僕には見当もつかない。四～五月が旬の山椒の葉は、今はすっかり固くなってしまい、食べることができない。でも、その味を知っている祖父母に教わって、僕も作ってみたい。そして曾祖母を思いながら味わってみたい。来年の春が楽しみだ。